

## 「石穴神社 奥の院 調査報告」

神道文化学科2年1組98番

P022126

吉嗣敬介

### はじめに

日本列島において石に関係する信仰は、木・水などのそれと同様に、自然物に対する信仰の一角を形成するものである。特に石の信仰の形態は、次のように多様である。

- 1) 石そのものを神に見立てたもの。石そのものに<sup>いしがみ</sup>靈魂を感じるもの。〈石神・御神体の石〉
- 2) 神が降り立つ場所としての石。〈<sup>いわくら</sup>磐座・<sup>いわさか</sup>磐境〉
- 3) 祭祀に関係し、なんらかの力を発揮するもの。〈石製祭祀用具・各種玉など〉

さらにこれらの石達は、次のような分類ができる。

- A) 人間の力によって動かし得なかったもの。地表に露出した巨岩・巨岩群。〈磐座・石神〉
- B) 特定の場所に動かされたもの。〈磐境・石神・御神体〉
- C) 人間によって加工されたもの。〈石製祭祀用具・一部の御神体〉

本レポートでは、「神が降り立つ場所、人の手によって動かせない巨岩群」である「<sup>いわくら</sup>磐座」として、私の生家でもある<sup>いしあなじんじや</sup>石穴神社の<sup>おく</sup>奥の<sup>いん</sup>院を報告する。私にとって信仰の対象であるこの地を物質的に計測するといった行為は、今まで行なった事も無くためらわれたが、同時に気づかされる事も多く石穴神社の事を考える良いきっかけになった。

また、本レポートは次のとおり進める。

### 1.石穴神社の立地

### 2.石穴の地名

### 3.石穴神社

- (1)概要 (2)詳細 (3)奥の院

### 4.写真に見る石穴神社 奥の院

### 5.石穴神社の信仰

- (1)概要 (2)信仰事例 (3)太宰府天満宮との関係 (4)二柱の石穴様  
(5)奥の院

## 1.石穴神社の立地

石穴神社は、福岡県太宰府市石坂2丁目13番1号に在する。太宰府は律令制下の古代からおよそ室町時代にかけて、大宰府（おおみこもちのつかさ）が置かれた場所である。石穴神社はこの大宰府政庁跡から見て東やや東南東の方角にある。大宰府の南北22条・東西各12坊と言われる条坊制から考えると、左郭12坊5条から東に1kmほどの地点で、ここに高雄山という標高151mの低い扁平な山がある。その北西斜面の中腹にあるのが、石穴神社である。

この高雄山は水源で、この水流は石穴神社の池に注いだあと、現在は側溝によって隠れているが、御笠川まで流れていると思われる。御笠川は宝満山（御笠山・竈門山とも）から博多那の津まで流れる川で、途中、政庁跡の南を通る。

石穴神社は高雄山から北西を向いており、その延長線上は四王寺山（大野山とも）である。四王寺山の麓が大宰府政庁であって、広い見方をすれば政庁の方を向いているとも考えられる。

都の東側の霊的な山という事で考えると、藤原京の天香久山・平城京の春日山・平安京の大文字山もしくは南東の方角だが伏見の稲荷山が思い当たる。石穴神社も稲荷神社であって、これには共通点があるのかもしれない。ちなみに信者さんの中には、「菅公左遷の際に京都伏見から着いてきたお神様」「配所の菅公に稲穂を届け飢えを救った稲荷のお神様」とするような口伝を伝える家がある。あるいは京都から勧請されて、似た立地の石穴に祀られたものなのかもしれない。

もう少し立地の話を続け、太宰府の住人にとっての石穴の位置を考えてみる。旧太宰府村（宰府村）は、太宰府天満宮門前町の上三町（三条・連歌屋・馬場）と下三町（大町・新町・五条）の六町から成っているが、石穴は馬場区に属しその南の端っこである。石穴が馬場区の中心地から1kmちかく離れているのに馬場区に属する理由は、石穴神社の参道が40年ほど前まで馬場の町屋の端から始まっていた事にある。団地ができたために現在地である高雄山の麓へと移動したが、かつて一の鳥居は馬場の溝尻口近くに建っていた。そこから小山や田んぼしか無い中の参道を、500mほど緩やかに登り石穴神社に着く。町の切れ目から参道が始まり石穴神社まで何も無いのだから、「石穴まで含めて馬場」という土地観念が生まれたのだろう。この馬場の端は宰府村の東南の端でもある。高雄山の向こうは当時の吉木村、阿志岐村（古代に蘆城駅が置かれた所）であり、全く別の生活圈なのだ。

また、高雄山の山頂には「大行事」の石塔が祀られている。この大行事石塔は太宰府天満宮が祀っており、『太宰府市史・民俗資料編』には次のように説明してある。

「高雄山頂にある大行事は太宰府天満宮御神幸祭の事始めとして、八月三十一日の早朝から一番に作った注連を、神職・当番町の若手・中老・祭祀係などが本殿で御祓いを受けたあと、山頂まで担いで行き、石塔に注連を張り、供物を供えて祝詞を奏し、秋祭り執行の無事を祈願する。そのあと塔の前で相撲の型を演じて帰り、神社で注連打ち相撲が始まる。そのためこの石塔のことを、”相撲のお神様”と呼んでいる。」

高雄山頂の大行事石塔



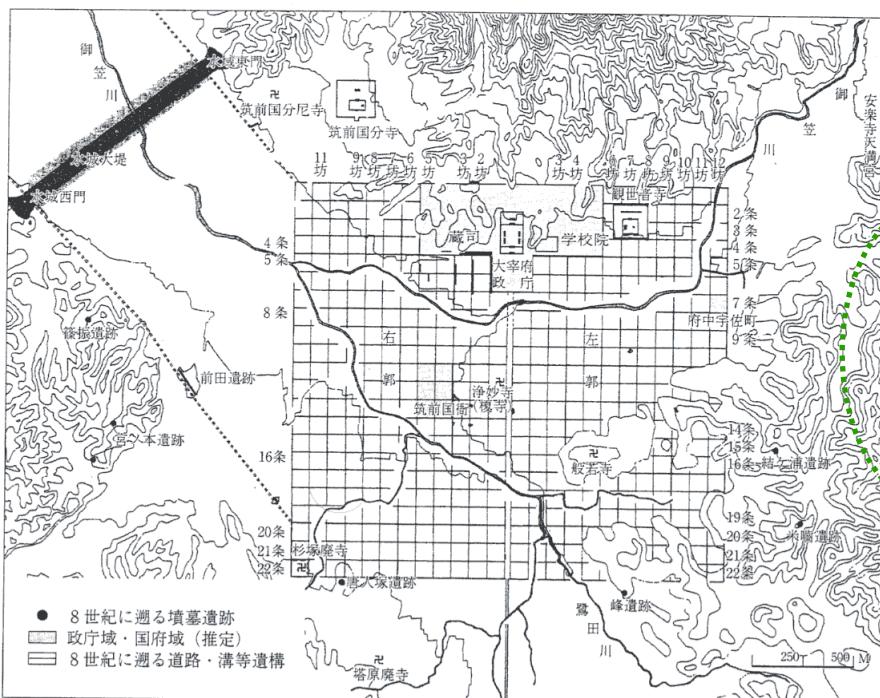
しかし、この大行事石塔には、「文化十一甲戌年九月 太宰府 観世村」という銘文が彫られている。観世村は大宰府政庁の周辺の村であって、神幸祭には直接関係がないと思われる。この事がどういった経緯を持つのか分からないが、いずれにせよ政庁付近の人間によるこの地への信仰が、文化十一年（1814）当時存在したのは確かなようである。北部九州の民俗に詳しい西南学院大学・山中耕作教授が『大いなり 第149号』に寄稿された論文『配所の菅公を助けた伏見稻荷 一石穴稻荷神社の消息一』によると、「北部九州一帯において大行事社は、多く境界の神である。」という事であるから、政庁付近の観世村から見ても高雄山は東の境界だったと思われる。



太宰府全体図

マピオン  
(<http://www.mapion.co.jp/>) より

石穴神社



大宰府条坊 比定地  
と石穴神社の関係

『太宰府発見』森弘子 著より

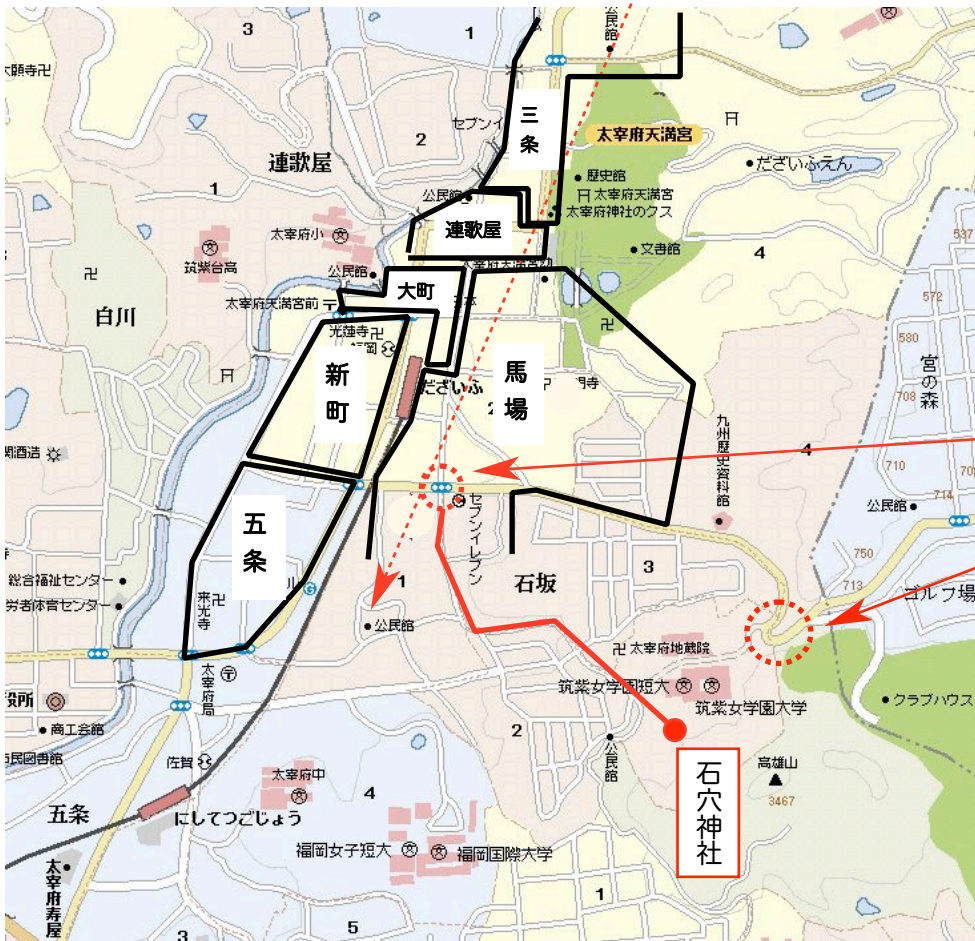
高雄山

大宰府条坊復元図（宮本雅明氏作成の原図より）



高雄山 遠景

石穴から見て大宰府政庁の方角の秋山公民館前の丘から撮影。



六町と石穴神社の関係

マピオン  
(<http://www.mapion.co.jp/>)  
より

旧一の鳥居

泣き別れ

上三町（三条、連歌屋、馬場）は近世以前、安楽寺天満宮の社家町だった。対して、下三町（大町、新町、五条）は商工業主の町であった。

石穴神社の参道が、馬場のはずれから始まっているのが分かる。現在でも大祭時には、この参道沿いに幟が立てられる。

## 2.石穴の地名

石穴神社の住所は現在の行政区割では「石坂」になっているが、これは15年ほど前におこなわれた区画整理によるもので、元々の字名ではこの辺り一帯は「石穴」である。

「石坂」というのは、九州歴史資料館の前の坂を100mほど登った所にある、通称「泣き別れ」という高雄山の脇を<sup>よしき</sup>通って吉木地区へと続く峠の辺りの事で、「斜面」の意味であると同時に、宰府村と吉木村の境の「石境」であると思われる。これは「立地」の項で述べたとおり、高雄山周辺を境とする観念とも対応する。

現在、日本に存在する住所表記の中で、「石穴」の地名を MapFanWeb (<http://www.mapfan.com/>) で調べると次の通りである。

- 1) 岩手県東磐井郡大東町猿沢石穴
- 2) 愛知県豊橋市史老津町石穴
- 3) 愛知県豊橋市大崎町石穴
- 4) 愛知県渥美郡渥美町亀山石穴
- 5) 福岡県太宰府市石穴

岩手県に一件、愛知県に三件、そして福岡県に一件であり、いずれも「字」のようだ。

次に「石穴」という地名を、文献上に探してみた。『出雲風土記』には「飯石郡・石穴山」という記述が見える。その他には『日本書紀 卷九』神功皇后紀の最後『百濟記』の引用の中に、「石穴」の文字が見える。以下にそれぞれを引用する。

『出雲風土記』飯石郡（『神典』より）

「石穴山。郡家の正南五十八里なり。高さ五十丈あり。」

『日本書紀 卷九』神功皇后（『神典』より）

「六十二年、新羅不朝。この年に襲津彦を遣して新羅を撃たしむ。

[百濟記に云ふ、壬午年、新羅、貴國に奉らず。貴國、沙至比跪を遣して討たしむ。新羅人、美女二人を莊飴り、津に迎へ誘る。沙至比跪、其の美女を受けて、反りて加羅國を伐つ。

(中略)

一は云ふ、沙至比跪、天皇の怒りたまふを知りて、敢へて公に還らず、乃ち自ら竄伏る。其の妹、皇宮に奉る者あり。比跪、密に使人を遣して、天皇の怒、解くるや不やを問はしむ。妹、乃ち夢に託せて言す。今夜、夢に沙至比跪を見ると。天皇、大に怒りて云はく、比跪、何ぞ敢へて来ると。妹、皇言を以て報す。比跪、免れざることを知りて、石穴に入りて死りぬ。]

『出雲風土記』での「石穴山」の記述について、『神典』『古代地名大辞典』では「いわなやま」、『日本地名大辞典』では「いしあなやま」の読みを用いている。

また、『古代地名大辞典』では「現在の飯石郡赤来町南端の三国山（854m）に比定される。」としている。さらに『日本地名大辞典』では「今詳ならず。この記事によれば、或は飯石郡の南境方面にあるべきか。」としている。「いわな」か「いしあな」かは、読み下し方の問題で特に問題にはならないと思う。同じ事が、『日本書紀』の記述「いわあな」にも言えると思うが、こちらはそもそも、固有の地名かどうかを問わなければならない。

日本書紀の記事の内容は、「神功皇后 62 年に新羅が日本に遣いをよこさなかった為、日本は襲津彦（きつひこ）という武人を送って新羅を討とうとした。『百濟記』によると、沙至比跪（さしひく）（襲津彦）は新羅から出された女性二人を受け取り、反逆して加羅國（日本と同盟国・新羅にとっては敵国）を討った。加羅の王権は百濟に逃げ込み、事の次第を伝える。この事が日本の天皇に伝わり、天皇は怒って兵を送り、加羅國を助ける。ある伝えによると、沙至比跪は天皇が怒っているのを知って、公には帰らず、潜伏する。沙至比跪の妹に天皇へ仕えている者が居たので、沙至比跪は使いを送って取り次いでもらおうとする。妹が天皇に、夢で沙至比跪を見たと伝えてみると、天皇はなぜ帰ってくる、と怒った。沙至比跪は天皇の怒りが解けない事を知り、石穴に入って死んだ。」というものである。

歴史学者の古田武彦（ふるた たけひこ）氏は『ここに古代王朝ありき』の中で、この「石穴」は現太宰府市の石穴ではないかとし、百濟記の言う天皇は神功皇后以外の天皇で、九州に大和朝廷以外の王朝が存在していたのだ、としているが、両石穴を結びつける明確な論証は何もされていない。氏によれば、「百濟側が単に「石穴」と書く以上、当たり前前に認知されている場所でなければならない。また、密に使いを送れるほど朝廷に近くなければならぬ。この事から大和近辺では考え難い。妹が寵愛を受けていたのだから、男性の天皇だ。」と、大雑把に言うところの論拠で、氏は、北部九州に大和とは別の朝廷があった論拠の一つとして挙げている。

もう一度繰り返す必要もないが、「石穴」が当時の百濟の言語において、どういった意味を持っていたのかが分からない。状態を示す形容詞的用法の名詞かもしれない。そうなれば、沙至比跪はただ単に石窟に入ったのであって、なんら不自然な事はない。しかし私はこの件に関する十分な知識を持っておらず、何とも言えない。

私の言える範囲では、仮に「石穴」が地名だったとすると、朝鮮半島の中で石穴の地名を探さなければならないが、「沙至比跪は公に帰らず潜伏していた」のであり、「妹に使いを送った」と考えると、日本の事のようなのである。太宰府近辺には、神功皇后が応神天皇を産んだ「宇美八幡」や、神功皇后の笠が飛んできた「御笠」の伝説など、この時代にまつわる伝承は多い。そして先にも述べた石穴の立地条件から、石穴が意識されていた可能性はある。そうすると大陸にも近く、朝鮮半島で認識されていた可能性も出るだろうか。余談ではあるが、現在でも北部九州は地名に関して、「原＝はる・ばる」とするなど大陸読みと考えられるようだ。

次に「使い」の問題だが、この時期まだ大宰府政庁は成立していなかったとしても、既にこの地域は対外防衛の要所になっていたと考えられ、都までの使いを出すには問題なかったのではないか。むしろこっそり帰ってきて隠れ、都に連絡をとれる環境と考えれば、北部九州は最適であったかとも思う。しかしこの点に関しては、出雲の石穴山も同条件である。現在字名の残る愛知、岩手の各所に関しては、地理的に無理があると思われ、『百濟記』のこの記述とは無関係だろう。こう考えると、両石穴が結びつく可能性はあるのかもしれない。以上、『百濟記』の「石穴」の記述が地名であったら、という前提での空想である。

以上、残念ながら石穴神社の「石穴」に関する確かな記述を、何らかの文献上に見つける事は今のところできない。また、『筑前國続風土記』(宝永<sup>ほうえい</sup>6年 1709)には、次のとおり「高尾山」として高雄山周辺の事が触れられてはいるが、神社の存在に関しては触れられていない。

『筑前國続風土記』卷之八 三笠群 中

「高尾山は宰府村にあり。岩屋の城をせめし時、秋月勢の陣所なりといふ。」

「岩屋<sup>いわや</sup>の城<sup>しろ</sup>」とは大宰府政庁北部の四王寺山中に築かれた山城で、戦国時代(天正14年1586)に薩摩の島津勢に後押しされた秋月藩<sup>あきづき</sup>によって攻め落とされている。『太宰府市史 考古学資料編』によると、この秋月勢の陣所は高雄山の南側斜面(石穴神社から見ると、尾根を越えた山の裏側)で発掘調査され、その存在が確認されている。また、同市史には高雄山南側斜面の石穴遺跡の発掘記録が載っており、縄文早期の押形文土器や、中世の墳丘、火葬施設跡も確認されている。墳丘からは、土師器と渡来の銅銭20枚が出土している。

他には、「近世、石穴神社の社殿が台風で壊れた際、安楽寺天満宮<sup>あんらくじてんまんぐう</sup>が修復にあたった」という記録を読んだ、という話を聞いている。安楽寺天満宮の社領地に入っていたとすれば、太宰府天満宮の資料の中に、「石穴」を見つける事ができるかもしれない。

### 3.石穴神社 (1)概要

石穴神社は旧社格制度の中においては無格社で、現在も神社本庁包括にはならず単立宗教法人である。御祭神は宇迦乃御魂大神うかのみたまのおおかみとなっているが、明治以前もそうだったかどうかは怪しい。信者さん達の伝承にあるように伏見から勧請されたとしても、稲荷信仰ではその向こうに勧請元の神社を意識する事は少ないと考えられる。それは別個の個性の神を感じているわけで、神道全体について言える事ではあるが、特に稲荷信仰に関してはその傾向が強い。勧請された当初そうした意識があったとしても、次第に薄れて行くのが自然だろう。現在信者さんたちを含め私たちも、「石穴様」という認識に立っている。そうでなければ、同じ境内地の中に同じ祭神、同じ稲荷の社が幾つも存在するという現象は説明できない。例えば天神様の御社で、別の天神社を祀っているといた話は聞いた事が無いのだ。

こうした御祭神の話を含め、石穴神社にはそれらを立証するべき資料は残っていない。由緒書きはおろか、なんの資料もないのだ。そうした文書類はあるにはあったそうだが、戦後の貧しい時代、吉嗣家の家屋を移築する際に燃やしたり、または持っていかれたりしたようだ。そうした物の価値・重要性が全く無かった時代の話である。今になっては、こんな物があった、という程度の話話を聞くだけになっている。唯一それらしい物と言え、幕末ごきょうに五卿落ちして太宰府に滞在していた三条実美公が、太刀を紛失し、返還を願って石穴神社に願を掛けた。そうするとたちどころからびつに太刀は見つかり、その成就の御礼に石穴神社へ供物を奉じた。その供物の入っていた唐櫃が残っている。

石穴神社は氏子区域を持たない。石穴に対する信仰は、三条公の例からも推察できる通り、産土型うぶすなの土地神のそれではない。いわゆる「霊験あらたか」系の信仰である。故に、信者さんの分布は地縁に関係がないので、広範囲にわたる。太宰府天満宮の門前町六町の中（馬場の全域・連歌屋、大町、五条の一部）に、約150世帯の「初午会はつうまかい」という崇敬会がある。また、この崇敬会とは別に、福岡・博多一帯、筑豊地方、遠くは関西から関東までにおよそ500世帯（大祭参詣は約250世帯）の信仰する家々がある。

「初午会」は一見、地元・地縁による信仰のように見えるが、氏子区域は太宰府天満宮に属する家々である。この事は、門前町としての六町の成立意義から考えても明らかであり、特に上三町に関しては、元々、安楽寺天満宮社家の居住区域である。ただ、天満宮は道真公の霊廟という性格が強い為、土地神ではない。では元来の土地神が石穴かと言うと、馬場の住民に関してはそうした傾向を持つが、他の町の住民にとっての土地神は、宝満山ほうまんざんの竈神社かまどじんじやだろう。馬場にしても、全ての家が「初午会」に所属していない事から考えると、地縁とは言い難い。また、石穴神社を崇敬している家々のほとんどが商家である事を考えても、現在では「商売繁盛」の信仰がより強いと言える。

### 3.石穴神社 (2)詳細

高雄山山麓の一の鳥居をくぐり、右手に小さな池を見ながら先に進むと、石の鳥居があり緩やかに石段が始まる。少しずつ登りながら朱塗りの鳥居の列の中を50mほど進むと、また石の鳥居があり、ここから急な石段が始まる。右手は直径3mほどの岩がごろごろと折り重なる谷状になっている。昔は谷の上部から滝のように水が落ちていたらしいが、現在は水の道が変わり、水脈は谷底の岩の下を通っている。谷を登る急な石段を30段ほど登り切ると、200坪ほどの平



地があり、ここが境内のお庭になっている。このお庭の正面に石穴神社本殿があり、お庭の縁にそって半円状に末社や社務所が並ぶ。正面の本殿に向かって、左に清水稲荷そして社務所、右に奥の院へと続く石段、中山稲荷、お手水場、石高稲荷である。

お庭の奥は更に山が迫っており、本殿は斜面に接して建っている。拝殿の奥に幣殿があり十段の階を上った所に大床、そして神殿がある。神殿は昭和30年代に建てられたもので、中には、御神体の鏡、眷族と思われる狛犬のような物が一對、白狐が一体（どちらも陶器か）、それと金の御幣があり、五色の絹垣と四方に房が掛けられている。神殿の外、ちょうど後ろ側には、幹周り5m80cmと4m20cmの大きな楠の神木が二本たっている。

奥の院へは、本殿向かって右側の階段から上がる。石の鳥居をくぐると左側、本殿の外壁に下足棚が据え付けてあり、奥の院へ上がる者はここでスリッパに履き替える。下界からの履物とここから先の履物を替えるのだ。下足を履き替えた後、石段を二十段ばかり登ると10mほどの鳥居の小道になりそれを抜けると、奥の院へと続く岩々が姿を現す。

この奥の院への入り口に石の小祠があるが、これは桃若稲荷といい、筑豊地方との境にある大根地山の大地神社の遥拝所である。昔、吉嗣家には九州三大稲荷として石穴神社・大地神社・祐徳稲荷神社の三社を描いた掛け軸があったそうだ。私の知る限り、この地方で稲荷は大きな神社の境内の裏などに祀られる場合が多い。稲荷の神は人々の実際の生活に関わり、現世利益に力を発揮するという信仰観念があるためだと思われ、ほとんどの神社がその近くに稲荷神社を持っている。しかし、上記の三社は佐賀の祐徳稲荷が現在群を抜いているが、稲荷神社としては独立した大きな神社である。そのため、九州三大稲荷といった観念が存在したのだろう。石穴に末社として、これだけ様々な稲荷神社（清水、中山、石高、桃若）が集まってきているのも、そうした理由だと思われる。

話を奥の院への道について戻す。木々が生い茂る山の中に、ぽっかりと空間が空いている。そこに直径2~3mの岩々が折り重なって連なっている。奥の院へはこの岩の上をつたうようにして渡って行かなければならないが、最初の石の上には、「是より下足をおぬぎ下さい」と刻まれた石柱が建っている。私の祖父は、「裸足で行って足を切られては困る。」と言ってこの石柱を紙で隠したりしていたそうだが、それ以前、昭和以前ここから先は裸足で進んでいたようだ。信仰的に、ここから先は特別な場所となる。

### 3.石穴神社 (3) 奥の院

奥の院全体を構成する岩々は、花崗斑岩である。およそ奥行き20m、幅13mの空間に、直径2~3mの岩が無数にひしめき合っており、一番奥に幹周り5mの楠の木と、その根元にいくつかの岩々の間にできた「穴」があり、ここが「奥の院」である。この「穴」の奥は部屋状の空間になっていて、170cm四方、約一坪の広さがあり、高さは約90cm~100cm、一部高い所で180cmといった具合で、人が2~3人がんで入れる程度である。

また、我々は「奥の院」という呼び方をする場合、狭義に最終地点の「穴」の部分を指しもするが、基本的には岩の上を登り始める部分からが「奥の院」という感覚である。その全体が磐座であり、「穴」はその威部<sup>いぶ</sup>なのだ。

この花崗斑岩の磐座全体は、おそらく自然にでき上がったものだろう。岩の積み重なりは地下深くまで続いており、岩の間を縫ってかなり下まで潜る事ができる。地下には水が流れている。そうした自然の岩脈上部のむき出した部分の要所要所に、足を踏みしめる為の石が人的に置かれたり、あるいは割った岩を屋根のように置いて所々の穴ぐらを形成している。最終部分の「穴」だけは、岩と岩との間に石を詰めるようにして、隙間が埋めてある。

先に「割った岩」と書いたが、奥の院の岩には、岩を割ろうと開けた<sup>やあな</sup>矢穴が残っている。矢穴は大きな岩を割る際、「矢」と呼ばれる<sup>くさびがた</sup>楔形の道具を打ち込む為にあらかじめ開けられる穴で、よく城の石垣などに見る事ができる。穴の大きさは縦4cm、横8cm、深さ2~6cmで、6cmほどの間隔で点々と並んでいる。この矢穴の開いた岩は、奥の院参道沿いに三つ、そのうち割られずに穴だけが残る岩が二つ、奥の院から少し山の中に入った所に四つほど、こちらも割られずに置かれた岩が多く、割られているのは一つだけである。ほとんどの岩が、割る目的で矢穴を開けられたにも関わらず、割られていない。

こうした聖域の石を割って移動するという事については、「信仰の対象になっている石は比較的、質の良い石が多く、あながい石材として持っていかれている。」という<sup>すぎ</sup>國學院大學・<sup>やましげつ</sup>榎山林継教授の見解もあり、そんなものなのかもしれない。また、その石をどこに持っていっただのか、という事について考えられるのは、移動距離の短いものから、石穴神社の石垣、秋月勢の陣所、<sup>ごうしんと</sup>太宰府の町の中の<sup>せきとう</sup>庚申塔など<sup>だざいふせいしやう</sup>石塔類、<sup>そせき</sup>大宰府政庁の<sup>みすき</sup>礎石、<sup>ていぼう</sup>水城の堤防、などであろうか。このうち石穴神社の石垣は、奥の院の石よりも白い部分が多く、まだらもはっきりしていて、<sup>かこうがん</sup>花崗岩いわゆる<sup>みかげいし</sup>御影石のように見えるため、違うかもしれない。

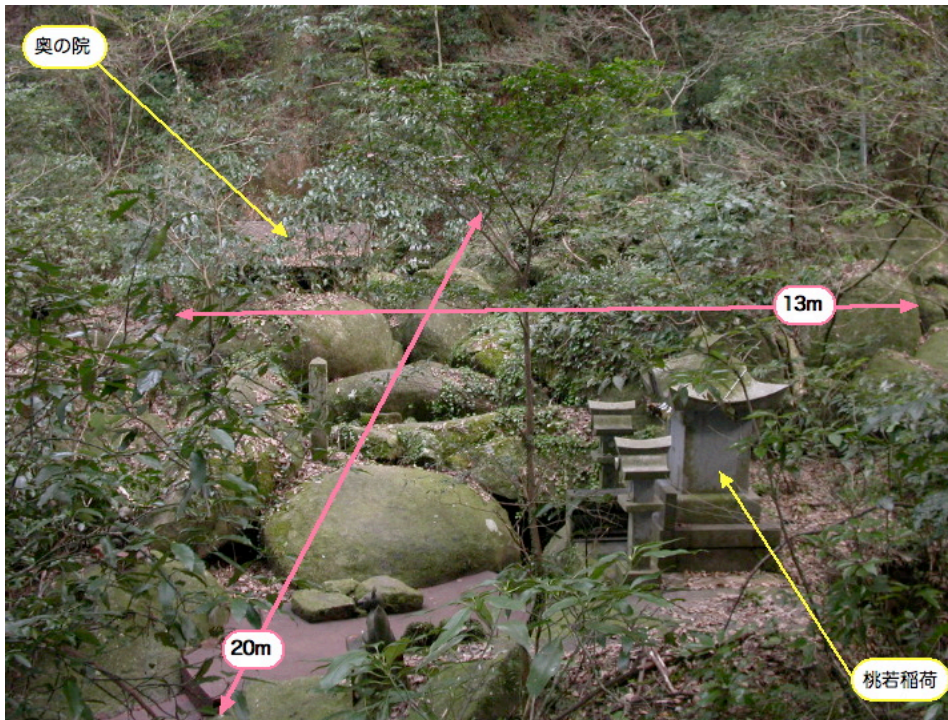
出発地点の石塔から、数個大きな岩の上を登り、右手に下る。小さな踏み石の上を渡りながら左にカーブすると、また登りになる。右手に小さな<sup>さか</sup>脊族が置かれ、石が段状に積まれている。そこを登ると右に折れ、最終地点の外壁の岩の縁を回るようにして下る。正面に楠の根を見ながら左にUターンして数段降りると、注連縄が張ってあって、灯明台、香炉、石の神饌台などがあり、威部の「穴」が開いている。

穴の奥には小さな<sup>ほこら</sup>祠が安置してある。この祠は昭和37年に奉納されたもの。その奥にもう一つ昔の祠があり、これは明治22年のものである。穴の開口部は80cm真四角くらいのもので、そこから1mほど入った所は更に狭く、祠の左脇の底辺60cm高さ60cmの三角形の隙間を潜る。祠を置く以前は、もう少し大きなスペースだったろう。ここを潜ると、前述した一辺170cm・高さ90~100cm、一番奥は高さ180cmの空洞になる。この空洞の中には何も無いが、隅の方にいくつかの石が台のように積んであったり、30cm真四角ほどの石板が置いてある。おそらく、昔この中で「お籠りの行」などをおこなった際に持ち込んだ物か、もしくは更に古い祠の一部かと思う。他には、古い小さな鳥居などが朽ちるままに埋もれていた。

「お籠りの行」とは夜通し、つまり通夜で行をおこない、お神様と話を<sup>だいにん</sup>して交流するもので、特定のお代人さんを中心にした信者団体によっておこなわれることが多い。石穴神社では、昭和60年ごろまで「巳の通夜」などと言って、<sup>つうや</sup>稲荷の縁日である「午の日」の前夜に、奥の院の穴の中で行がおこなわれていた。また、「お通夜堂」と呼ばれる、通夜の際に休憩をとるための建物もある。こうした行をおこなった人の中には、「音楽のようなものがずっと聞こえます。」  
「とても楽しい気持ちになります。」という風なことをおっしゃる人もいた。行を通じてお神様と交流をし、一体になるという事か。

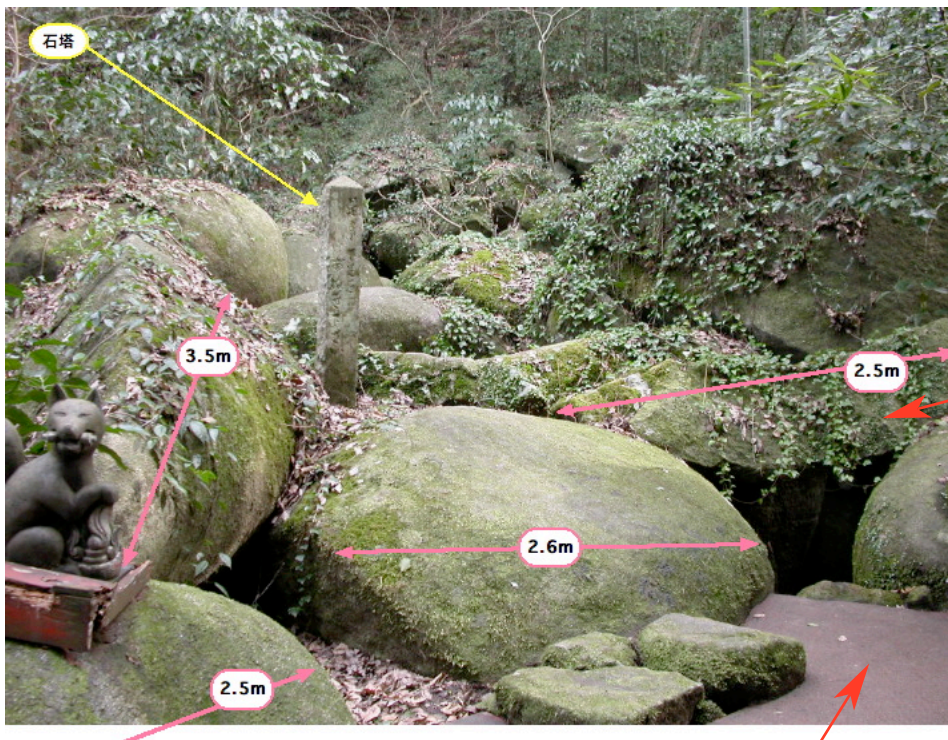
#### 4.写真に見る石穴神社 奥の院

写真を用いて奥の院の説明をする。写真に書き込まれている数値は、およその目安にしてください。20mの巻き尺を使用して、大体のサイズを測ったものである。



奥の院全景

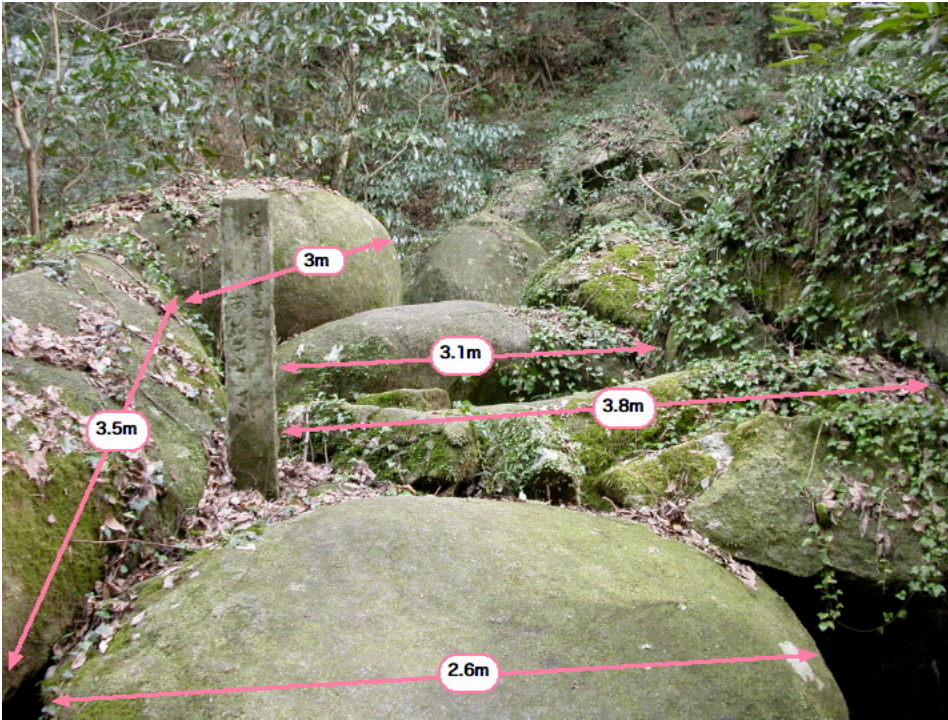
参拝者は写真左下から入ってきて、桃若稲荷の前で左折、岩の上を登り、奥の院まで行く。



奥の院 入り口

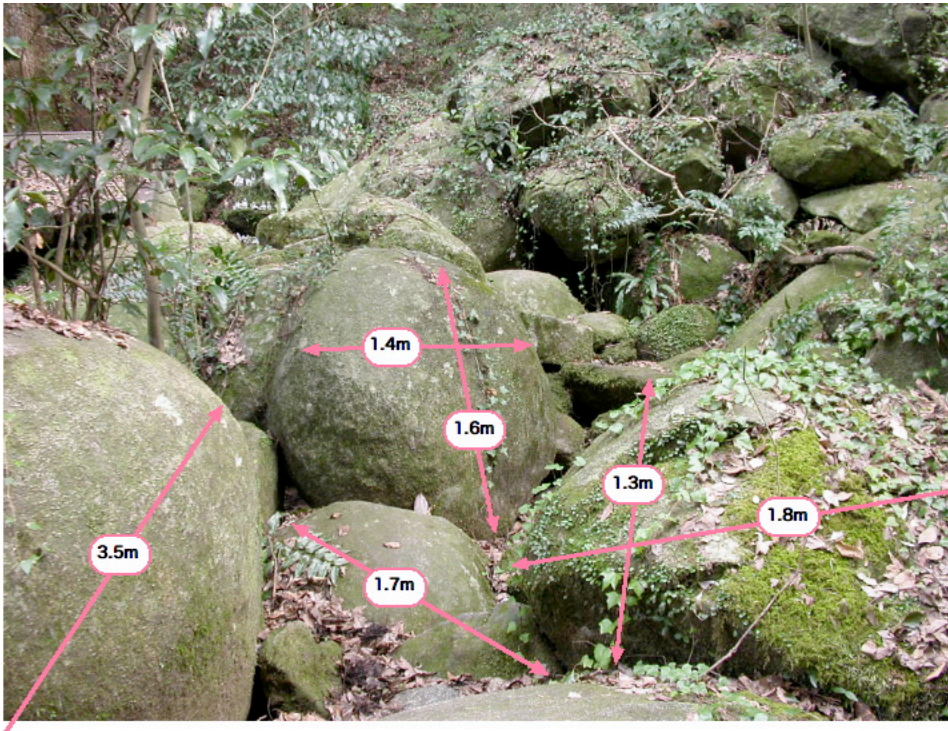
この岩は人為的に割られた岩で、矢穴の跡が残っている。そうした岩を、屋根のように置いたものか。この穴の中も、信仰の対象となっている。

この鉄板は、以前この場所に大きな穴が開いてしまって危険だった為、補強用に張られた。



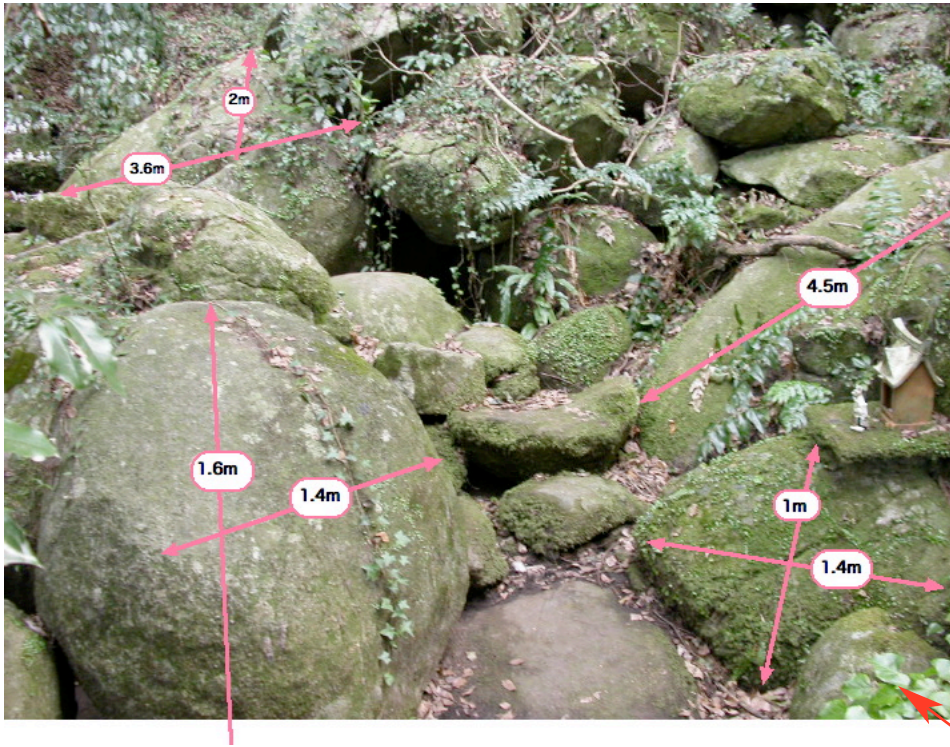
奥の院 1

最初の登り始めの部分。「是より先下足をおぬぎ下さい」と書かれた石塔が立っている。



奥の院 2

最初の数個を登った所。更に岩の上を渡りながら、写真中央の岩の手前を右に下る。



奥の院 3

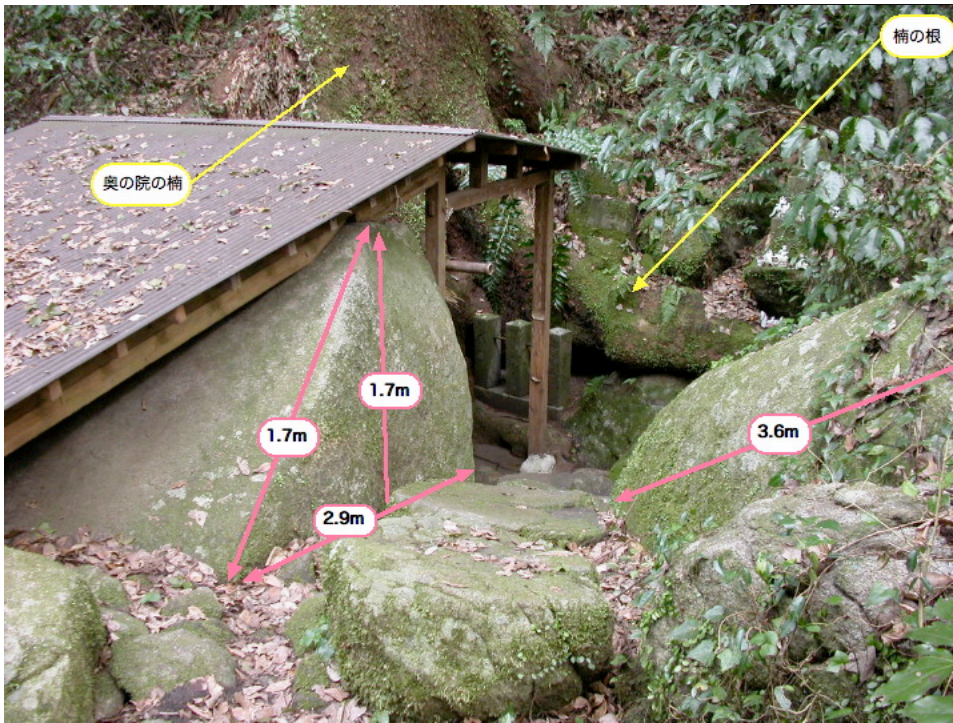
最初のひと山を越え、下った所。岩々の間を歩いて行き、段状の石を登る。右手に置かれた菅族の小祠は、信者さんが置いていかれたものだろう。

この石にも矢穴が残っているが、割られてはいない。



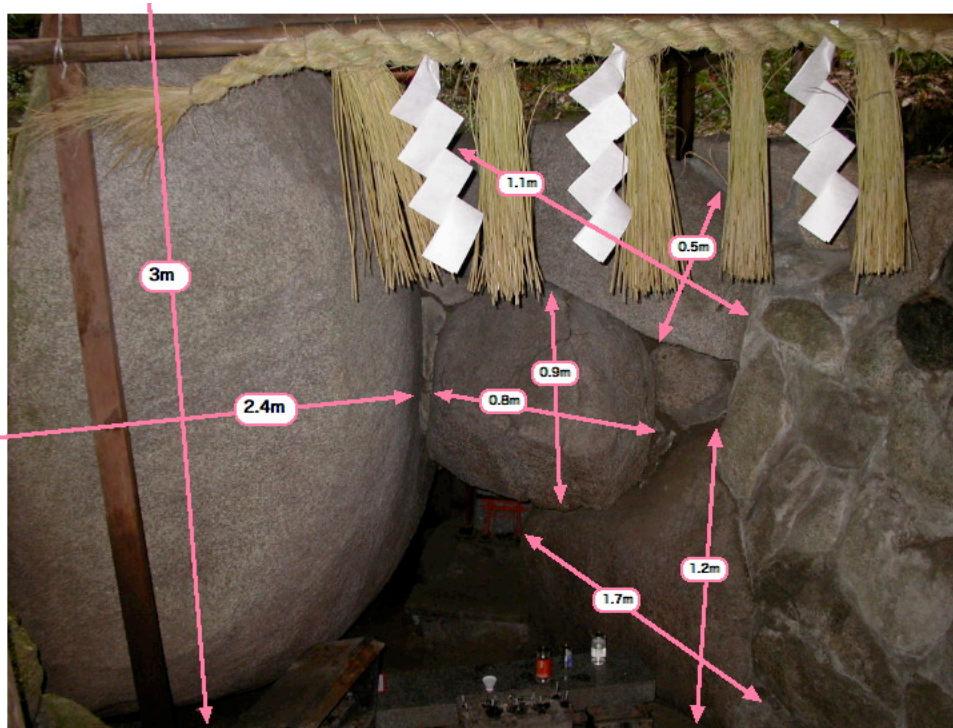
奥の院 4

段を登る途中。ここを登ると、右手にまた降る。奥に見えるのは、奥の院のトタン屋根。雨除けの為のもの。



奥の院 5

奥の院へと下る。正面に楠が根をはる。ここを左にUターンすると、最後の「穴」がある。



奥の院 6

最後の威部の「穴」。大小の岩が折り重なっている。隙間には、石が詰められている。穴の奥には、小祠が置かれているが、その前に置かれた小さな鳥居が見える。

右側のコンクリートで固めた石垣は、危険防止の為。



穴の中

小祠の左脇から、奥に入る事が出来る。この隙間は、底辺60cm・高さ60cmほど。祠が置かれる以前は、その分広がったと思われる。



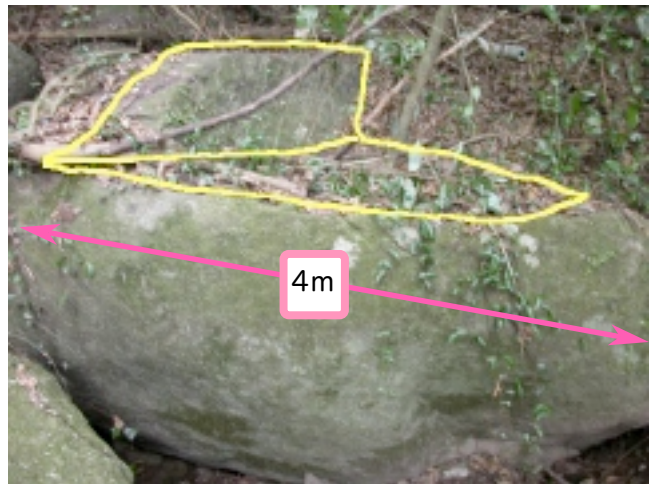
手前の祠の奥には、古い祠が置かれている。手前の祠は昭和37年、奥の祠は明治22年。



中は石室のようになっている。広さは、170cm×170cmで一坪ほど。高さは1mほど。

隅の方には、石が積んであったりする。昔はここで「行」をされる信者さんたちが居たそうで、その際に持ち込まれたものかと思う。





- 上段の二枚は、矢穴を開けられた石。穴を開けたものの、割らずに放置されている。
- 中段の二枚は、森の中にある上部を大きく切り取られた岩。左の写真のように矢穴の跡があるが、こちらははっきりと割られている。
- 下段の二枚は、奥の院の入り口にある岩。この岩も割られており、矢穴の跡が見える。ちょうど屋根のように岩と岩の間にまたがっている為、その下が穴のようになり、信仰の対象になっている。



## 5.石穴神社の信仰 (1)概要

前述したが、現在の石穴神社の信仰は祈願型・靈験あらたか型である。とは言っても、困った時の神頼み、といった単純なものでもない。信者さんは石穴様を「家」の守り神として考えられており、その信仰は代々続くもので瞬間的祈願とは違う。そしてこの信仰は地縁には関係しておらず、土地神の信仰ではない。そうした村の鎮守的信仰によく見られる無意識的信仰とも違い、かなり意識的な信仰である。であれば、やはりこれは「家」の信仰であって、その「家」とは、家族を基本とする日本の「家制度」による「家」であって、一族でもある。「家」を守るという事は、その血縁を守るというよりは、「家」の「生業」を守るのであって、その「生業」に関わる人々つまり「家人」の人生を守るものである。「家」が必ずしも血縁に頼らないということは、もろようし両養子をとってまで家を存続させようとした例を見れば明らかである。ばんせい いっけい万世一系の幻想は、近代の産物だと思われる。「家制度」が「家」の存続、「家」の繁栄を希望させ、意識的な信仰を生んでいったのだろう。

そしてその信仰のきっかけとなるのは、それぞれの「家」が持つ「神話」である。その神話は、昔々といったものから最近の話まで様々あり、内容は「昔、先祖が石穴様に助けられた。」「代々、石穴様をお祀りすれば家が飢える事はない。」「白い大きな動物（白狐か）に導かれてこの地までやって来たら、病気が治った。」「先祖がお代人（民間宗教者）に尋ねると、九州のお稲荷さんが見え、半信半疑で見えたとおりにやって来たら、石穴神社があった。」といったものである。現代において、こうした話は非科学的とも取られがちであるが、信仰とはそういったものであって、少なくともこの人達にとってこれらの神話は現実である。

## 5.石穴神社の信仰 (2)信仰事例

石穴神社の信仰に関する記述を、『太宰府市史』『大いなり』より抜粋する。

『太宰府市史 民俗資料編』

はつうま  
「初午

農家では稲の守り神として、商家では商いの神様として、旧暦二月初午の日にはあちこちの稲荷社に参詣した。この地域では、おおねち大根地稲荷・いしあな石穴稲荷の初午祭が盛大で参詣人も多かった。特に石穴稲荷は稲荷社の中でも位が高いといわれ、信者が博多や粕屋郡からも多く参詣し、しりぐち溝尻口から石穴稲荷までたくさんののぼり幟が立ち、露店がずらりと並び賑やかなことであった。」

「さまざまな民間宗教者

人びとの求めに応じて治病・厄除け・吉凶禍福などの祈祷・呪い・占いを業とするいわゆる民間宗教者には、修験者・行者・巫女・荒神盲僧など多種多様なものがいた。

太宰府市域内でも、次のような人びとの存在が古老の記憶に残っている。

(中略)

・ばば馬場の石穴稲荷にお稲荷様のだいにん代人がいた。お尋ねに行くと狐がのり移っているいる教えてくれた。」

『大いなり 第149号』より

「責任役員のMさんの母堂は胸を病んでいたが、まず一週間で治る、というお代人のお告げがご主人にあって、事実<sup>じじつ</sup>に全快した。その後もお告げがある度に、何かしら都合よくことが運び、いつの間にか一家挙げての信仰となった、という。東京都台東区<sup>はつねずし</sup>の初音寿司のMさんも熱心な信者である。

(中略)

Mさんのご先祖が、たまたま伏見稲荷大社にお参りされたとき、お稲荷様が夢枕にお立ちになり、この九州太宰府の石穴稲荷神社にお導きいただいたのだ、という。

(中略)

Iさんは、白い犬に誘われて、筑紫野市の二日市駅付近から不思議に石穴稲荷神社に連れて来られ、驚きながら参拝したら、何かしら心地爽やかにになり、持病が快癒した、という。

(中略)

Yさんは、車に布団を積んで大分県の水分峠を移動中、誤ってガードレールの切れ目から谷底に転落。何回転もして車は大破したが、身一つはまったく無事だった、という。」

「奥村武氏<sup>おくむらたけし</sup>（昭和三年生まれ）は、元西福岡病院副院長<sup>にしふくおかびょういん</sup>。名医の誉れ高い内科医で、医学誌の権威でもある。傍ら、博多の郷土史に明るい。博多の豪商奥村家<sup>おくむらごよくらん</sup>の出で、『筑前名所図絵』全十巻の著者奥村玉蘭の直接の子孫である。奥村家では、太宰府天満宮に参詣するときは、昔から、まず石穴稲荷神社にお参りしてからのこと、としていたという。

昌泰四年（901）春、菅原道真公<sup>すがわらのみちざね</sup>が大宰府に流される時、朝命で道真公を護送して来て、そのまま博多に居着いたもの、という。（奥村家が）

(中略)

奥村氏によると、石穴稲荷神社御祭神は伏見稲荷でいらっしゃる、といい、道真公が大宰府で餓えないように、伏見から稲穂をくわえてその配所に運んでいた。それで、道真公は、後年、ご自分を祀る太宰府天満宮が、石穴に祭られた伏見稲荷よりも、大切にされると、どうも気が引けるから、まず石穴稲荷神社に先に参って、その後で、太宰府天満宮に参って欲しい、とお考えなのだという。まだ故太宰府天満宮名誉宮司西高辻信貞氏<sup>にしたかつじのぶさだ</sup>がお元気なころ、太宰府天満宮境内で出会った折りに、「今、石穴稲荷にお参りして来ました」と言うと、「それはそれは有り難うございました。御祭神もさぞお喜びで」と挨拶を返してくださった、と懐かしがる。

事実、奥村家では、代々、石穴稲荷神社を尊信すれば餓えることがない、と伝えて来たという。またよく信仰し、お代人に依頼して祈願を絶やさなかった、という。（後略）」

## 5.石穴神社の信仰 (3) 太宰府天満宮との関係

石穴神社の信仰と、太宰府天満宮との関係は、これも無視できないように思う。同じような話をされる信者さんやお代人は他にもいて、「道真公の母上が道真公を心配して、伏見のお稲荷様を遣わされた」という風に、詳細は違うものの同じ系統の話である。それぞれの話が歴史的事実とは多少異なる部分などがある。また、お代人の話は神懸かり的なもので、本レポート内での論拠としては不適切とする意見もあろうが、信仰共同体が持つ共同幻想の記憶と考えれば、はなから無視するわけにはいかないように思える。

石穴神社と太宰府天満宮との関係についての史的資料は、今回確認できていない。前述したとおり、「天満宮が石穴神社社殿を修復した」という記録は、探せば出てくるだろうと思う。また、石穴神社が安楽寺天満宮の社領地であった可能性も、同様である。そうした資料が出てくれば、菅公を救った神とする信仰と合わせて、菅公の霊廟である安楽寺を守護する神、としての石穴神社の位置も見えてくるかもしれないが、現在のところ、当て推量でしかない。

ただ一つ、事実として確認できているのは、石穴神社宮司家である吉嗣家は、安楽寺天満宮の社家であったという事である。吉嗣家は「じんじんじゅういっか神人十一家」という、いわゆる下級神職の家で、本家は連歌屋幸之辻という社家町の中にある。幕末期、吉嗣家には男子が生まれず、一人娘に養子をもらい家を嗣がせようとするが、その直後に男子が産まれる。仕方がないので家督・家屋敷は養子に嗣がせ、社家という家職ちやくなんが石穴神社で嗣いだようだ。この嫡男筋が石穴神社に居着いた理由は、吉嗣家の隠居がそこに居たからである。おそらく吉嗣家は、当代の現役が安楽寺天満宮の社務にあたり、隠居が石穴神社を守るという形をとっていたのだと思う。この形は、私の祖父の代まで引き継がれていた。

また、上記の石穴神社に居た隠居というのは、吉嗣茂太夫という人で、生没年は不明だが「ぶんせい文政七甲申九月吉辰 とりつぎしやげ取次社家 吉嗣茂太夫 覚宣」と、石穴神社の鳥居に銘文が残っている為、文政7年(1824)には石穴神社に居た様である。また、石穴の吉嗣家が本家と別れるのは、茂太夫の二代後の話で、茂太夫が本家吉嗣家の跡取りとして、じんじん神人だった事も明らかである。さらに吉嗣家の言い伝えによると、吉嗣家は代々、宮司職であると同時にお代人でもあった。特に茂太夫は今にも伝わる有名なお代人である。安楽寺天満宮の社家が同時に石穴を守り、かつ代人でもあったという事実について、その変遷は分からないが、興味深い問題だ。石穴を守っていた社家が、安楽寺天満宮の拡大と供に社家組織に組み込まれたものか、安楽寺天満宮の社家という立場で石穴を守っていたのか、という問題である。この点は今後の課題であるが、菅公守護という信仰の存在と共に、考えなければならない。

## 5.石穴神社の信仰 (4)二柱の石穴様

菅公守護の為に伏見から勧請されたお稲荷様、という信仰によるのか、信者間には二柱の石穴稲荷を認める見解が多く存在する。これは、奥の院に元々いらっしゃった石穴様と、菅公左遷の際に伏見から勧請された石穴様、という二柱である。前者は奥の院に、後者は御本殿にというものだ。

この信仰形態を表す事例としては次のようなものがある。京都伏見の稲荷山には、各地の稲荷信仰の信者が建てた塚つかが沢山あるが、石穴様の「お塚つか」もここにあり、関西在住の信者さんたちの遥拝所のようにになっている。そしてこの塚には「源九郎稲荷」「源五郎稲荷」の二柱が記してあるそうだ。いつ頃に建てられたものなのかは分からないが、二柱の存在は確かである。また、石穴神社拝殿には、近隣の稲荷神を列記したと思われる額がかかっているが、そこにも源九郎、源五郎の両稲荷神の名が書かれている。

二柱の神観念の成立について、奥の院と本殿という分け方だけを見ると、神社の原初形態である神迎え形式の奥の院への信仰から、後の社殿を合わせ持った形態に移った為に、両者が分裂したように認識された、とも考えられる。しかし、石穴神社の立地条件、原始信仰形態の奥の院の存在、菅公との関連を示唆する信仰、といった要素を考えると、現奥の院に対する信仰はもともと何らかの形で存在し、そこへ菅公守護の目的で伏見稲荷が勧請され、結果二つの別

個の個性を持つ神への信仰が誕生した、と考えられるのではないだろうか。

勧請した伏見稲荷がなぜ石穴に鎮座したか、という問題については、伏見稲荷は平安京大内裏から見れば東南の方角にあり、南方守護である。石穴神社は太宰府天満宮から見ると南方、やや東よりに位置し、菅公の霊廟として造立された安楽寺の南方守護の意味を持ち合わせて、高雄山石穴の地に鎮座した、とは考えられないだろうか。そうなると、勧請時期は伝承に基づく菅公左遷時、鎮座時期は没後しばらく経ってから、となる。

## 5.石穴神社の信仰 (5)奥の院

奥の院への信仰は、前述したように「二柱の石穴様」の観念がある事から、石穴神社本殿に対するものとセットではあるが、別のものである。そしてその形態は、より古い形によって残っていると見えよう。自然石の折り重なり全体を磐座と見なし、そうした岩々の間にできた「穴」を神との交流の場と考えるものだ。「穴」はもちろん、最後にたどり着く威部の「穴」が一番の聖地ではあるが、途中にできた穴ぐらにも、信者さんは神との交流を感じているようである。

奥の院の入り口に、岩と岩との間にできた穴があるが、そこにも誰が持って来たのか、小さな祠や石塔が置かれていて、お供え物や賽銭など、参拝の跡が残る。奥の院のあちこちに置かれた<sup>けんぞく</sup>眷族などにも参拝の跡はあるが、眷族は神様よりも位が下がり、あちこちに神性を感じるという意味においては同種だが、穴の中に対する信仰とは少し違う。また、「穴」の中には眷族は置かれぬ。穴の中には、眷族以上の神性を感じているようだ。そしてこうした穴の中の祠などは、朽ち果てればまた誰かが持ってくる、といった状態で、祠はあまり意味を持たない。下の末社（清水、中山、石高の各稲荷）のようにあちこちの稲荷神が集まってきた、という感じでもなく、重要になるのはやはり「穴」のようである。

信仰の中で「穴」というのは、どのような意味を持つのだろうか。石穴神社の例で考えると、穴は神との交流の場であって、べつに穴の中に神様が住んでいるわけではないが、そこから<sup>と</sup>きは神の領域であって、穴は神の世界との境であり入り口である。神の世界は、場所や空間、時を共有できる世界ではあるが、次元の異なる異界、他界である。穴という、暗く先の見えない場所を介して、その他界とつながるのだ。

「穴」を信仰の場とする事例は日本の各地に存在すると思うが、私は沖縄へ行ったときにも同じようなものを見た。沖縄の信仰によく見られる形は、御嶽など聖地のあちらこちらで神との交流を持とうとするもので、それ自体が石穴神社奥の院とよく似ていた為に面白く思った記憶がある。交流の場としては、岩壁の<sup>くぼ</sup>窪みや小さな<sup>どうくつ</sup>洞窟、または木の<sup>いとまん</sup>ホラなど様々あり一概には言えないが、「穴」というカテゴリーも確かに存在するようである。糸満市の白銀堂には、海に向かって洞窟が開いている。何かの説明によれば、その洞窟を通して海の向こうのニライカナイを拝むのだそうだが、実際に拝んでいる人々がニライカナイを意識しているかは怪しいものの、他界に通じるようである。また、折口信夫の『古代研究』には、石垣島宮良村の「にいる」という他界へつながる海岸洞窟の例が挙げられている。他にも、ガマと呼ばれる洞窟は、<sup>ふうそう</sup>風葬を行う場として使われたり、神々に対する信仰の場になったりしているようだ。

沖縄の例を挙げたが、石穴神社奥の院と共通するのは、御神体などそのものに神が宿る、といった信仰ではなく、神との交流の場、連絡所としての「穴」の存在である。この「穴」については、今後興味深い研究テーマになるかと思う。

## 最後に

石穴神社という、記録や縁起のまったく残っていない神社が対象だった為、現在進行中の信仰以外は、ほとんど憶測で書くしかなかった。しかし、今まであいまいに口伝えされてきた事柄をまとめてみると、おぼろげながらその形は見えてきたように思う。石穴神社の発生時期を含め、「穴」に対する信仰など、今後の課題は山積している。

## 参考文献

『神典』大倉精神文化研究所編 昭和11年

『日本地名大辞典 第1巻』日本図書センター 昭和12年

『古代地名大辞典 本編』角川書店 平成11年

『太宰府市史 考古学資料編』太宰府市史編集委員会 太宰府市 平成4年

『太宰府市史 民俗資料編』太宰府市史編さん委員会 太宰府市 平成5年

『筑前國続風土記』貝原益軒 宝永6年（『益軒全集卷之四』 明治43年 中村学園図書館配付PDF版）

『大いなり 第149号』所収「配所の菅公を飢えから救った伏見稲荷 ー石穴稲荷神社の消息ー」山中耕作 伏見稲荷大社講務本庁 平成13年

『古代研究1 祭りの発生』折口信夫 中央公論新社 平成14年

『太宰府発見』森弘子 海鳥社 平成15年

『九州の苗字を歩く 福岡編』岬茫洋 梓書院 平成14年

『ここに古代王朝ありき』古田武彦 朝日新聞社 昭和54年

1) 安楽寺天満宮とは、太宰府天満宮の旧称である。

菅公没後、その霊廟として建立された安楽寺は、その後の天神信仰の形成と共に安楽寺天満宮とも呼ばれる、宮寺形式をとり、仏教的色彩の方が強かった。明治維新での神仏分離令により、安楽寺天満宮は神道に一本化し、太宰府神社と名称を変える。さらに戦後、太宰府天満宮となり、現在に至っている。本レポートでは、近世以前の太宰府天満宮については「安楽寺天満宮」もしくは「安楽寺」を用い、近代以降については「太宰府天満宮」を用いる。

2) 「威部」は、琉球の信仰を説明する際、用いられる用語である。

琉球では「いび」と発音され、御嶽などの聖域においてその核心をなす部分を指し、主に自然石や老木などの自然物である。本レポートでも、聖域の核心をなす部分として使用する。しかし、琉球では同一の聖域に複数の威部が存在し、その観点に立てば、石穴神社奥の院においても、各人が神との交流を持つ「穴」全てが威部である、と言える。